
僕らの生き方

しろろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの生き方

【Nコード】

N1166A

【作者名】

しろろ

【あらすじ】

どこにでもありそうな、とある世界。天界には神とそれにつかえる天使が住み、地上には人間や古い木に宿る精霊、火を吹く竜。それに、闇の化身たる魔王や手下の悪魔なんかが共存するありふれた世界に、ある日事件が起きた。全知全能たる神が、地上にはびこる闇、魔王討伐のため勇者を選び出せ、と天使達に命を下したのである。そんな理不尽な神の言葉に、正に寝耳に水状態の天使、精霊、竜、悪魔、魔王。それに、勇者選考に知らぬ間に見事当選した哀れな貧乏貴族の青年。そんな彼らと世界を巻き込んで、魔王討伐戦の

幕はきつておとされたのである。当事者それぞれの視点で送る、
ハ
イ
テ
ン
シ
ヨ
ン
フ
ァ
ン
タ
ジ
ー
小
説
開
幕
で
す。

ケース1・天使生き方（前書き）

プロットの状態では、実にシリアスかつ感動的な話だったのに、実際文章に起こしてみると、無惨なまでのコメディー。

しろつの（いい加減な）人間性がうきばりにされました。

一昔前の、そう、まさにファミコンでロールしたようなありがちRPG世界観に仕立てました。楽しんで読んで頂けると幸いです。

ケース1・天使生き方

ケース1・天使の生き方

ある日、とある世界に事件がおきた。

全ての主にして、全智全能たる神が、しもべたる天使に、一つの命を下した。

曰く、

「人間の中から一人勇者を選び、地上にはびこる闇、悪魔の長たる魔王を討伐させよ」
と。

*

「……以上が、神のさたである。皆速やかに勇者の選考を行うように」

空たかくに存在する天界の城の広間には、白き羽を持つ天使たちが集まっていた。

空気はリンとすみ、城のあちらこちらに続く長い廊下は、真っ白で一点のくもりもない。

誇り高き聖なる天使は、神に仕えるものとして、また、人々より敬意と敬愛を受けるものとして、皆同様に穏やかかつ冷静な種族であった。

しかし彼らは今、神の言葉を伝えた三対の羽を持つ天使の言葉に驚き、戸惑っていた。

「天使長！それは真でございますか！？」

一人の年若き天使は、広間を去っていく大勢の天使たちをかき分け三対の羽を持つ天使長に駆け寄った。

「私が、神に直接お会いし、この耳で確かに拝聴しました。間違い

ありません」

天使長は、若き天使を諭すようにつけた。

しかし、若き天使の勢いはとどまる事を知らず、さらに詰め寄った。
「そんな！確かに彼らは地上の民に対し、神の御心にそむく行為はいたしますが、それは、年に2・3度の事！しかも、この行為は、我等天界と地上の王それに魔王自らの協定によって決められた事でしょう。それを今になって彼らの心を裏切るような形で……！！」

天使長は、苦しげに眉をひそめ、そしてゆっくりと首を横にふった。
「神の移り心は今に始まった事ではありませんまい。神にもわれ等が計り知れぬほどの思いがあられるのでしょうか」

若き天使は、その言葉にふっと肩の力を抜いた。

「ああ……、では、神はまた……」

二人の天使は、互いに胸の前で指を組み、祈りをささげる様につぶやいた。

「全ては神の御心のままに……」

彼らの頭上には純白のベールが幾重にもひろがり、光が揺れながら降り注いでいた。

さながら、彼らの祈りが届くようにと差し伸べられた、神の手であるように。

ケース2・勇者の生き方

ケース2・勇者の生き方

ある日突然、俺は、没落貴族の跡取り息子から、“勇者”になった。

*

彼は、地上の大部分を統括する王国の貴族であった。

しかし、貴族とは言っても、没落寸前の貧乏貴族。生活は、下手をするところの農民よりもひどい、まさに極貧生活である。

いわゆる、国から“どうでもいい”とされる、部類だった。

「喜べ、息子よ。お前にいまだかつてない程の大役が、陛下より直々に承った」

「へー。そりゃ、スゲエや」

いまだかつてない程、目を爛々と輝かせた父親とは対象に、息子には全くやる気が感じられなかった。

落ちぶれ貴族のお先真つ暗な跡継ぎを地で行く、まさに夢も希望もない息子であった。

が、そんな息子の様子を知ってか知らずかさらりとスルーし、親父は威厳たつぷりにこう言った。

「お前は、“第一次・最近天変地異も何もなく超暇だし、ってゆーか、そんな事したら、回りからのブーイングが激しいから、とりあえず、被害の少ないイベント・そろそろ行つとく？大トリ、勇者一人が挑む魔王退治、大作戦！”の主役である、な、な、なんと！」

既に引き気味の息子を前に親父の勢いはさらにヒートアップをみせた。

もはや、彼を止める事ができるものは、誰もいなかった。まさに、神をも超えるパワーである。

「まさか、勇者に選ばれたなんていうんじゃないだろうな、クソ親父」

「馬鹿者ーッ！父のセリフを奪う息子があるかーッ！」

親父は、涙を流しながら息子を怒鳴りつけた。

しかし、当の本人の息子は冷めたもの。ぴしゃりと、たった一言で片付けた。

「ありえねえし」

息子は、少し伸ばした小指の爪で鼻をかき、はんつと笑った。

「ってゆーか、ぜってえ行かねえ」

「何を言うかッ！この親不幸者ーッ！！」

暑すぎる親父に息子は冷えきった目線を投げかける。

すでに、親父の暴走を止める気力もないらしい。

「お前がこの話を断ったが最後！我が家に未来はない！」

「すでにないだろ。今にもつぶれそうだが、この家」

親父の怒声で、と暗に匂わせる息子。

が、残念ながら親父にはその攻撃は通用しなかった。

親父は、無敵だったのだ。

「確かにそうだが……これはそう言う意味ではないのだ！

家名取りあげの上、下手したらこのワシの首がとぶッ！！」

「いいね、それ。座布団一枚」

息子は、ツツコミも投げやりだった。

と、言うより、勇者云々の話も信じてないようだ。

「愚か者め！これが証拠の書状だァー！！」

親父は、息子の顔にたたきつけるように、手に持っていた紙をひるげた。

息子は、あくびをかきながら、実に面倒臭そうに、目の前の文字をおった。

「……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

息子の動きが、文末の王のサインと王印を見た瞬間とまった。
そして、滝のような汗をかきはじめた。

「ありえねえーッ！！！」

息子は、頭をバリバリかきながら、あらん限りの大声で叫んだ。

「ありえねえ！マジありえねえ！っていうか、アホか！」

息子は、頭を抱えてうずくまった。

いっぱいいっぱいになっていた。

「何がとりあえずだ！ありえねえし！つか、題長げえっつーの！って言うか！って言うか、やつら、今にも崩壊寸前没落貴族の息子で、死んでも特に問題ないからって、俺を選びやがった！ぜってえそうだ！間違いねえ！こう言うのって普通、王子様が行くんじゃないのかよ！？定番だろ！！？」

息子が、落ちこみ、この先の人生に落胆していると、親父は、がっ
と息子の肩をつかみ、涙ながらに語った。

「何を言うか、息子よ！いくら貧乏貴族と言えど我が家は名門！ましてやお前は跡取り息子！いくら世界の為とはいえど、なぜおめめ可愛い息子を激地へとむかわせようか！」

「親父・・・・！」

息子は、希望のまなざしをもって親父を見つめた。

息子が最初で最後、親父を尊敬の目で見た瞬間。感動の場面である。

「しかし、陛下がこのワシなどに頭を下げてまで頼みこまれては、いくらなんでも否とは言えん！誇り高き名が泣くと言うもの！ここは、世の為人の為、ひいては、我が家の財政・・・いやいや、未来の為、ワシは泣く泣く是と・・・・・・・・」

「黙れこの腐れ親父！！！」

スパーン、と小気味よい音が響いた。

息子は、自らのすり切れた靴を握りしめ、さげんだ。

「用は、金に目がくらんで息子を買ったって事じゃねえか！それが親のする事か！！！」

「仕方ないじやろうが！ワシだって人生一度くらい旨いもん腹いっぱい食べたいわ！」

親父は力一杯叫んだ。

もう、滅茶苦茶である。

「開きなおるなー！！」

息子は再び親父を靴で殴った。

「！」

「！！！」

激しい息づかいの中、しばらくにらみ合いが続く。

「……………」

「……………はあ」

しかし、以外にもその緊迫した空気を破ったのは息子であった。

「すでに決まっちゃまったモンは仕方ねえ。俺も腹をくくるか。まあ、

ここは恩を売つとくのも悪くねえ」

「息子よ……………」

親父は、感動のあまり、息子を抱きしめようと腕をひろげた。

「近づくんじゃねえ」

が、再び息子の靴の餌食となる。

息子は、一息つき腕を組んでいった。

「……………まさか、お偉いさんも、生身の人間がああ規格外の化け物とすぐに戦えっていうんじゃないだろうな」

親父は、赤くなった頭をさする手を止め、落ち着きはらっていった。

「うむ。その事なのだが」

親父は懷から一枚の紙を取り出した。

「地図、か」

「うむ」

親父は、地図を広げ、小さくバツが書いてあるところを指差した。

「この森には古くから精霊が住むといわれておる。まずはここにむかい、彼らに助言を求めるのが上策であろう」

「本当にいるんだろうな、精霊なんて」

息子は頭をかいた。

やけくそなのだろう。

「いる」

自信たつぷりの親父の言葉にうなずき、息子は大きく伸びをした。

「うーん。やるしかねえか」

薄暗い部屋には、どこからか風がはいってくる。

それは、庭に咲く甘い花の香りを運び、そして、新たに生まれた勇者の背を押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1166a/>

僕らの生き方

2010年10月11日22時19分発行